

---

# 荊の処女王

とらふく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

荊の処女王

### 【Nコード】

N9356T

### 【作者名】

とらぶく

### 【あらすじ】

女の子が主人公の異世界トリップものです。百合ではないですがちょっと要素はあるかもしれません。逆ハーでもありません。むしろ主人公には少し厳しめです。コンプレックスだらけの普通の女の子が頑張る話になったら、と思います。誤字・脱字等ありましたらおしえていただければ幸いです。

## 少女のおわり

ひくりと反った喉が震えた。目じりにたまった涙がつつ、と頬を滑り落ち貫かれたところが燃えるように痛む。幸せか不幸せかと問われれば間違いなく不幸せだと答えるところだが少女に未練はない。後悔もしてはいない。悲しいことなど何も無い。こぼれた涙は生理的なものだと思い込み、少女はそっと目を閉じた。

ふわりと目の前で栗色が揺れた。柔らかかそうできてくせない髪が春の風に遊ばれるさまはまるで少女漫画の一場面のようだ。新入生のように初々しい様子があるわけではなく3年生のように卒業に向けた微かな切なさがあるわけでもない。高校の2年生にあがるなど気楽なものだと日本人離れした容姿の幼馴染を眺めながら桃花ももかはあくびをかみ殺した。

「モモ、早く帰ろう」

見つめてくる琥珀色の瞳は黒目がちで栗色の髪と同色のまつ毛がふさふさと縁取っている。マッチが1本と言わず2本、3本ほど乗りそうだ。

「うん、そうだね」

そっけなく答えても意に解することなく幼馴染の美少女・のぼらは満面の笑みで桃花の手をとった。華奢な手が触れた瞬間びくりと強張った手にのぼらが気付いた様子はない。

肩に触れない程度の長さで切りそろえられた栗色の髪、小さな顔の中には長いまつげに縁取られた大きな瞳に形の良い唇がバランスよく配置されている。細い首筋から華奢な肩にかけてのラインは思

わず守ってあげたくなくなるような儂さを醸し出していた。

「春だね、モモの季節だね」

可憐な笑みに邪気はない。明るい色のブレザーを着たのばらはそのままモデルと言っても通用する容姿だ。

対して隣を歩く桃花はあくまで十人並の容姿。黒いセーラー服に肩甲骨を過ぎる程度の長さの黒髪、吊がちの目はそう大きいわけではない、鼻筋は通っていて整ってはいるがそれでも特別に可愛いという程でもなかった。

「それ、毎年言っね。でももう少ししたら野薔薇も咲き始めるでしょ？」

苦笑して返せばぶうと頬を膨らませつないだ手を引つ張られた。

「そんなのどうでもいいの、のばらはモモの季節好きだよ」

一人称が自分の名前でも許されるのは美少女故だろう、桃花にはとてもではないが真似できない。

隣同士の家生まれ同い年なこともあり姉妹のように育った二人だったが私立の高校に進んだのばらと公立の高校に進んだ桃花は疎遠になるはずであった。少なくとも桃花はそうなると思っていた。あの日の衝撃を今でも覚えている。入学式後の校門、セーラー服と学ランの黒の群れの中に凜と立つベージュのブレザー。出来たばかりの友達に断って慌てて駆け寄ったのは経験からだ、のばらを一人にしておくとは面倒なことになる。入ったばかりの高校で面倒を起こしたくはない。遠巻きに見ていた男子生徒を追い越して声をかければ花が咲くような笑顔で振り返った。

「どうしたの!？」

聞いてもただ暇だったの、としか答ええないのばらに困惑したが手をひかれるままに足を踏み出した。

暇なはずがない、高校に入学してすぐなのだから友人作りに部活の勧誘、校舎の場所を覚えたりすることはたくさんあるはずだ。特に友人作りはこれから3年間過ごさなくてはならない学び舎では重

要事項だと桃花は認識している。のばらの私立高校は中学からの持ち上がりは居なかったはずだ。

「ねえ、大丈夫？」

ほとんど同じ身長なのばらに引きずられるようにして帰り道を歩く。のばらからはいつもの余裕が感じられず桃花はただただ困惑するしかない。

不意にのばらが振り返る、不意の事に反応できなかった桃花は一步を踏み出してしまい頬が触れるほど顔が近づいた。慌てて身を離そうとするが繋がれた左手とは逆の手が伸びてきて桃花の肩からこぼれた黒髪を握りしめてしまい身動きがとれなくなる。焦点が合わないほど近くにある顔がひどく真剣な顔をしていた。

その時言われた言葉を桃花は覚えていない。ごうと吹いた強い春風に吹き飛ばされてしまったように思う。

「モモ？」

いつの間にか思考に浸かり足が止まっていたのだろっういぶかしげに名を呼ぶのばらの声に顔を上げる。なんでもないと答えて一步を踏み出せば靴裏にアスファルトではない感触を捉え体勢が崩れた。液体に足を踏み入れたかのような微かな抵抗しかないそこに恐怖し、反射から地面に手をついた。否、つこうとした。見た目は普通のアスファルトだったが手をついたそこも液体のように桃花の体を支えることはなく何の抵抗もなくついた手を飲み込む。アスファルトにめり込む腕、という異様な光景に吐き気すら覚え肩から下げている学生かばんを無意識に握りしめた。

この間時間にして1秒にも満たないかもしれない。けれど桃花はこの時の恐怖を一生忘れることは出来なかった。のばらの死にそんな絶叫と共に。

## 白の聖殿

いつの間にか眠っていたようだ、腹の上に重みを感じて目が覚めた。まどろむ意識の中、またいつものように遊びに来たのばらが寝ている自分に寄りかかっているのだろうと思つてそつとその柔らかい髪を触る。共働きの両親は隣家の幼馴染を信頼して鍵の隠し場所を教えているのでばらが勝手に上り込むのはいつもの事だった。とはいっても今年小学生になった弟と帰宅部の桃花が家に帰る時間が早いのでばらが一人で桃花の家に上がりこむことはない。

さらりとした絹のような手触りに違和感を覚えるが暖かく、心地よい重みに再び眠気を誘われて開きかけた瞼を閉じる。深く息をすれば清々しい空気が肺を満たし違和感ごと意識が散った。

どこか遠くから水音が聞こえ、蛇口をきちんと閉めていなかったのかと桃花はのっそりと起き上る。寝乱れた黒髪が視界をふさぐのを鬱陶しげにかきあげて薄ぼやけた視界の焦点が合うのを待つ。体の節々が痛みを訴えそのうえ制服の黒が見えると言つことは家に帰つてから床で寝てしまったのかと考えたが家に帰つた覚えがない。そのうち、意識と共に視界がはつきりしてきて桃花が自分の身に起こつたことを思い出し、ぞつと肌が粟立った。

視界に移るのは一面の白い壁だ。大理石の冷たい床に石膏でできたかのような滑らかな柱、細かい意匠の施されたそこはテレビで見ることがないがギリシャの神殿のようだった。

震える足を叱咤して立ち上がり少し離れた位置に落ちていた鞆を拾い上げる。

「誰か、居ませんか？」

思っていたよりも小さな声しか出てこず次はもう少し大きな声で呼びかける。わん、と静かな空間に響いた声に応えはなく肩に下げた鞆の紐を握りしめた。周りを見回しても白い壁と通路があるばかりで他には何も無い。上部にある窓から光が差し込んでいたが桃花の身長よりも随分高い位置にあるそこから外をうかがうことはできそうになかった。

見渡してわかったことは桃花が眠っていたのは円形の大きなホールのようなところで、そこから左右に通路が伸びていた。耳を澄ませば水音は右の通路から聞こえてくる。立ち尽くしていても時間が過ぎるばかりで何も起こらない。差し込む光が夕焼け色に染まり始めたのを見て桃花は慌てて足踏み出した。人口の明かりがないこの場所で夜を迎えてしまえば暗闇に一人というありがたくない状況に陥ってしまうだろう、それはなんとしても避けたい。

不意に頬に風邪を感じて左の通路を見る。まるで桃花が顔を向けるのを待っていたかのように左の通路から強い風が吹き日本人らしいストレートの黒髪を揺らした。風が吹くということはつまり外へ通じる場所があるのだろう。数秒迷ったがそうしている間にも外は段々と夕暮れに向かっていく。桃花は少しばかり早足で左の通路を進んだ。

ローファーが硬い大理石を踏む硬質な音が響く。白い通路は最初に居たホール同様高い位置に採光用の窓があったがそこから差し込む光はもうずいぶん弱く夜の気配を漂わせていた。

不意に途切れた通路、その向こうに夕闇に紛れ植物の葉が見えたとき桃花はほっとして足を速める。ほとんど駆け出すようにして外へ向かうが一步外へ出て立ち止まった。吹きつける風に髪が舞うがそんなことを気にしてられないほどの衝撃。

「うそ、なにこゝ・・・」

何が起こったか、起こっているのか桃花には理解できない。考えないようにしていたところもあるのかもしれない。

夕闇に包まれたそこはバルコニーのようだった。手すりの無いバルコニー、見えた植物の影は今まで桃花のいた建物の壁に張っていた蔦が垂れていただけだ。崩れ落ちそうになる足を叱咤してバルコニーの端まで行く、覗き込んで後悔した。とてもではないが降りられる高さではない上に見渡す限りの森と山。へたりこんで空を仰ぐ。もう、太陽は完全に隠れていた。

吹き上げる風にスカートを煽られ通路に少しだけ戻り鞆を抱きしめる。何かにすがっていないと泣き出してしまいそうだった。泣けなかったのは意地と癖だ。

「なによ、こころ」

つんと鼻の奥が痛くなる。人口の明かりはなかったが月明かりが随分明るく桃花の手元を照らしていた。見上げれば黄色い月が一つとその近くに青白く輝く月の半分程度の大きさの星を見つけめまいを覚えて顔を伏せる。

何も考えたくない、耳をふさいで目を閉じた。

## 白の聖殿 2 (前書き)

私生活がアレだったので随分間が開いてしまいました。マイペー  
スに書いていきますので気長にお付き合いいただければ幸いです。

## 白の聖殿 2

眠ることも出来ず膝を抱えて身を固くする。時折聞こえる遠吠えや獣の鳴き声に肩を震わせ、拳を握り恐怖をやりすごした。もし、一人夜の森で迷った時は獣道を避けて朝を待つこと。今は亡き田舎の祖母の言葉を桃花は忠実に守っていた。

朝になったら誰かがこの建物にやってくるかもしれない。小さな希望だが確証がないわけではない。捨て置かれた建物にしては綺麗すぎるのだ。

相変わらず状況は理解できそうにないが夜の冷えた空気と長い夜は嫌でも桃花を冷静にさせた。夜明けはまだ遠そうだ。まったく、何をしているのだろう。

ぼんやりと外を見上げる。いったん混乱が収まってしまえば空を見る余裕も出てきた。田舎のように澄んだ空。一面に瞬く星はこんなときでなければ弟に見せたかったと思うほど見事だ。大好きだった田舎の祖母は年の離れた弟が生まれる前に亡くなってそれと一緒に家も手放した。だから弟はこんな澄んだ空を知らない。

そういえば、ふと思い出すのはのぼらの事だ。薄情かもしれないが今頃思い出して長時間座り続け固まった体を軋ませながら立ち上がる。もしあの厄介な幼馴染がこの意味の分からない状況に巻き込まれていたら、そう思うと背に冷たいものが伝う。真つ暗な廊下を見て唾を飲み込んだ。それでもせめてあの広い部屋までは戻らなければ。空を振り返れば月はもうずいぶん低い位置にまで移動していた、夜明けはそう遠くはない。もう少し待てば朝日が顔を出すだろう。

しかしそのもう少し、の時間が惜しかった。抱きしめていた学生かばんを持ち直そうと体から離れたとき背後からものすごい風が吹き込み大きな影が月明かりを遮る。

きらきら光る赤い目。振り返った桃花がきちんと確認できたのはそれだ。気が付けば鞆を放りだし悲鳴を上げて走り出していた。

桃花にとつて幸いだったのは通路がまっすぐだったこと、うっすらではあるが朝日が顔を出し全くの暗闇ではなかったことだろう。頭の中が恐怖一色に塗りつぶされていた。

がつん、と足元が段差に引つかかる。体勢を崩し周囲を見ていなかった桃花は思い切りこけた。無我夢中で立ち上がり再び走り出そうと足を踏み出せば何か弾力のあるものにぶつかり再び体勢を崩す。乱れた髪が視界をふさぎ前が見えない。右腕を掴まれしりもちをつくことはなかったが恐怖に思考を塗りつぶされていた桃花は恐慌状態に陥った。拒否の悲鳴を上げて振り払おうと暴れるが払った腕もまたつかまれ身動きがとれない。さらに暴れようとする桃花の頭上から怒声が降りかかりはっとして上を見上げる。青い瞳、微かに緑がかつた目が戸惑うように桃花を見下ろしていた。言葉はわからない。

「もも！」

聞きなれた声、拘束していた人を押しつけられたのは目に涙を浮かべたのばらだ。腕を解放しさつと横に避けた青い目の人はじつと桃花を見下ろしていたが桃花は気づかない。

「大丈夫！？怪我してない、ああもうこんなに泣いて」

細くきれいな指が桃花の頬をぬぐう。走っている間に涙が出てしまったのだろうか、されるがままぬぐってもらい大丈夫だと告げようと口を開きかけ

「もも、もう大丈夫だよ。のばらが一緒に居るよ」

嗚咽しか出てこなかった。優しい表情をしたのばらが細くたおやかな腕で桃花を抱きしめる。柔らかくセーラー服の背をなでるのは腕に甘えブレザーの肩に顔をうずめた。細い体にすがりつき声をあげて泣いた。

安堵と漠然とした不安に涙が止まらなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9356t/>

---

荊の処女王

2011年10月21日11時59分発行